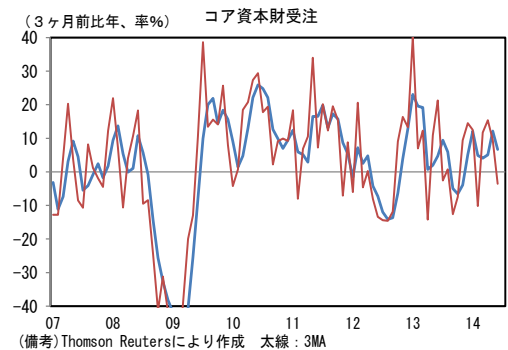


【海外株式市場・経済指標他】 ～コア資本財：解釈難しい～

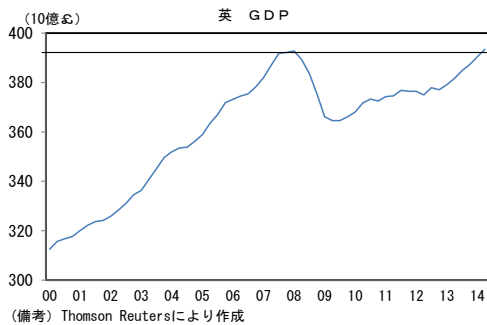
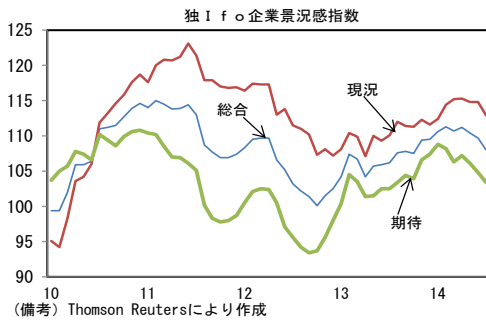
- ・ NYダウ平均株価は前日比▲123.23ドルの16960.57ドルで取引終了。一部企業決算を嫌気。
- ・ 6月耐久財受注は前月比+0.7%と市場予想(+0.5%)を上回り、2ヶ月ぶりの増加。民間航空機(+8.2%)、国防航空機(+15.32%)がそれぞれ大幅な伸びを記録。特に国防航空機は3ヶ月前比年率で+219.0%と非常に高い伸び。もともと、除く輸送用機器でも+0.8%と強く、内容は悪くない。最重要項目であるコア資本財受注は前月比+1.4%と予想(+0.5%)を大幅に上回ったが、反対に前月分は大幅に下方修正(+0.7%→▲1.2%)。単月の上振れを重視すれば“加速”、3ヶ月前比年率の鈍化(+12.2%→+6.7%)を重視すれば“減速”と評価が難しいが、製造業サーベイで新規受注が軒並み改善していることを踏まえると、向こう数ヶ月は堅調な推移が見込まれるため悲観論に傾けるのは時期尚早だろう。設備稼働率の上昇傾向持続に鑑みると設備投資意欲が衰える可能性は低いと判断される。セクター別では自動車(前月比▲2.1%)、コンピューター関連(▲13.9%)が全体を下押しした一方、一般機械(+2.4%)が伸びた。一方、気掛かりなのはコア資本財出荷。6月は市場予想(+1.3%)に反して▲1.0%と落ち込み、3ヶ月連続減少。四半期ベースでは年率+4.1%と1Qからの加速感(+2.2%)に乏しい結果となった。GDP(2Q)の下振れリスクを意識させる。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

【外国為替相場・債券市場】～独Ifo：製造業が懸念材料 英GDP：漸く既往ピーク更新～

- ・前日のG10通貨はUSDが堅調。SEK以外にアウトパフォーマンス、ドルインデックス（DXY）は今年2月以来の水準に上昇。USD/JPYは米国時間早朝に102手前まで上昇したが、米株現物が安く寄り付くと上げを帳消しに。他方、EUR/USDの下落基調は継続。IF0の予想下振れをきっかけに下落開始、その後は米金利が低下するなかでも水準を切り下げる展開となった。米欧金利差が名目、実質ともにEUR/USD下落を支持しているほか、テクニカル的にみても12年7月と13年7月を結んだトレンドラインをブレイクしており、新たなトレンドが出現した可能性が高い。28日日本時間でUSD/JPYは101.80近傍で膠着。
- ・米10年金利は▲3.7bpの2.466%。コア資本財受注・出荷の予想下振れに反応。欧州債市場は総じて堅調。独仏株が大幅下落するなか、コア、セミコア問わズラリー。経済指標は、7月独Ifo指数が108.0と3ヶ月連続低下、市場予想（109.4）を下回った。現況（109.7→108.0）、期待（104.8→103.4）がともに軟化。なかでも製造業の期待指数が3ヶ月連続で悪化、昨年8月以来の水準に落ち込んだ点は懸念材料。7月PMIの反発に疑問を投げかける内容だった。その他、8月独GfK消費者信頼感指数が9.0と2006年12月以来の水準に到達。英国ではGDP（2Q）が前期比+0.8%、前年比では+3.1%と予想に一致し、3%成長軌道を確認。水準は2008年1Qを凌駕して過去最高を更新。

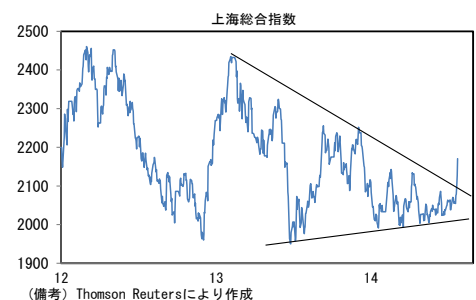


【国内株式市場・経済指標他】～6月データ：試金石～

- ・日本株は欧米株安の流れを断ち切り小安く寄り付いた後、プラス圏に浮上。
- ・今週は鉱工業生産（30日）、毎月勤労統計（31日）に注目。FOMCはTapering継続が“鉄板”であるうえ、記者会見もないため材料視されにくいだろう。声明文の変更もごく僅かに留まりそう。6月の生産は前月比▲1.2%と減産が見込まれているが、強めの内容となったPMIやロイター短観とは整合しない。予想下振れが常態化している生産統計にしては（珍しく？）上振れリスクがあるように感じられる。6月毎月勤労統計の現金給与総額は前年比+0.8%と5月確報（+0.6%）に続き、プラスが見込まれている。所定内給与のみならず、夏のボーナス増がどの程度反映されるかという観点から特別給与にも注目。本統計が確報で下方修正される可能性が高いことを踏まえると、市場予想を満たすことが最低条件となろう。逆に予想に届かなかった場合は実質可処分所得低下を通じた増税のネガティブインパクトが意識されそうだ。

【注目点】～そして日本株も動いた～

- ・VIX指数はじめ各種ボラティリティ指標が歴史的低水準で推移、世界的に不快なほど穏やかな状況が続くなかではあるが、少しずつ動意づいてきた印象だ。先週はEUR/USDがトレンドラインをブレイクしたほか、中国では上海総合指数が4日続伸（28日13：00時点でもプラス圏推移、年初来高値更新）、昨年2月から形成した三角持合の上放れに成功。このようにテクニカル面で重要な節目を迎える動きが目立つ。そうしたなか、週明け日本株も続伸スタートで日経平均は15500円を回復（1/23日以来）、年初からのレンジ打破に向けて動きだした感がある。7月雇用統計が市場予想を満たし、米景気拡大持続シナリオがより一層補強されれば、来月中にも昨年来高値を更新する可能性があるだろう。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。